

一生変らないきずなと友情

～ウィーン日本人学校創立30周年を迎えて～

創立時在校生 藤原・コッキア 美穂

私は1978年4月、今から30年前、音楽家である両親、小学4年の妹と一緒にウィーンにやってきました。私は中学1年生でした。こちらに来てすぐ現地校に転入しましたが、結局3ヶ月しか通いませんでした。頑張ってもう少し長く行っていればドイツ語も多少は上達したのかもしれませんが、3ヶ月というのは一番辛く中途半端な期間だったと思います。お友達は仲良くはしてくれましたが、ドイツ語がわからず、残念ながらあまり充実した学校生活とはいえませんでした。そんな時全日制の日本人学校が開校されると聞き、私は是非入学したいと思いました。

開校に向けて4月には日本の文部省から立岡甚雄校長先生を初め4人の先生方が派遣され、既にウィーンで開校の準備を進めておられました。日本人学校開校という任務を背負って来られていたものの、実際蓋を開けてみれば学校運営は「火の車」。私はまだ子供でしたので詳しい状況は聞かされてはおりませんでした。子供心に開校されるか、否か、かなり切羽つまった状況だということは感じていました。開校予定の9月も間近に迫った8月半ばから、父に何度も立岡校長先生に見通しのお尋ねの電話をしてもらいました。

そして8月末、何度目かの電話でようやく「何が何でも開校いたします」という心強いお言葉を頂き、私は飛び跳ねて喜んだのを覚えています。相当厳しい状況の中、私が日本人学校に通うことが出来たのは、あの立岡校長のご決断のおかげだと思います。

1978年9月1日晴れてウィーン日本人学校が開校しました。全校生徒30名、小学生は複式、中学生は複々式授業でのスタートです。それまで補習校で使われていた1区のSchwedenplatzの部屋を仮校舎として使うことになりました。仮校舎といってもただのマンションで、5つの薄暗い小さい部屋です。そこに育ち盛りの子供たちが毎日通ってきていたので、よく隣の住民からうるさいと怒られ、肩身の狭い思いをしながら学校生活を送っていました。学校と言っても設備も教具もなし。当時赴任しておられた辻正明先生のお言葉をお借りしたいと思います。

「あるのは、黒板、つくえ、いす、教科書だけ。これを果たして学校と言えるだろうか。しかし私たちの学校には学校の生命ともいえる最も大切なものがある。子どもたちと職員のやる気である。大きな困難を乗り越えて創設された学校であるだけに、立派な学校にしなければならないという決意がみんなの心の中にあるのだ。そのやる気と、子供たちと教師の信頼関係に支えられて、家庭的なすばらしい学校が一日一日育っていった。」

そんな学校生活で私の中にとっても印象強く残っていることがあります。私たち中学生の理科の授業を担当してくださっていた辻先生は、試験管やビーカーなど少し



開校式であいさつする初代の立岡甚雄校長＝1区のDominikanerbastei 19の仮校舎で1978年9月1日

ずつ必要な教具を揃えていって下さっていました。先生がある日1つの上皿てんびんを持って来られると、熱っぽくこう説明されました。

「これは立岡校長先生に何度もお願いして買ってもらったものなんだよ！」私たちのことをいつも最優先に考えてくださった校長先生ですから、このてんびんが授業に必要なことは百も承知でいらっしゃったにもかかわらず、すぐには許可したださらなかったと言うのです。わたしは実際上皿てんびんを買ったことがないので、一体どれ位するものかは知りませんが、掛かって1、2万円ではないでしょうか。それでも非常に渋られた、ということから、いかに当時の日本人学校の財政状況が苦しかったかが、ご想像いただけるのではないのでしょうか。「これが先生が大変な思いをして買ってくださったてんびんなんだ。大事に使っていこう！」と生徒皆が物の有難さを実感したものでした。

私たちは幸い、物が溢れる豊かな時代に生まれ育ちました。ですからそれまで「物に不足する」という経験をしたことがありませんでした。日本人学校には本当に何も無かったけれども、それを不自由と感じたことは一度もありませんでした。逆に、ひとつひとつ、備品や設備が整っていく喜び、そしてそんな学校に通える喜びのほうに勝っていました。このように物の大切さを身をもって体験できたことは本当に貴重な、そして大事な経験でした。

年も明けて1979年1月にかねてから準備中だった新校舎が完成し、19区の

Sieveringerstrasse に移転することになりました。2階建てのピンクの校舎で、昔は貴族の館だったそうです。今の立派な校舎に比べると10分の1くらいしかないかもしれないかもしれませんが、都心の仮校舎から移った私たちにとっては、それはそれは広い校舎でした。子供たちみんなが目を輝かせて意気揚々と学校に通ってきていました。



新校舎の校庭に集う児童・生徒ら＝Sieveringerstrasseで1979年夏

当時の日本人学校の特徴のひとつは、今もそうかも知れませんが、人数が少ないということです。それは良いことだと思います。私の妹の話をさせてもらえば、

彼女は恥ずかしがり屋で、日本ではクラスで何か聞かれても、無言で立ち続けるような消極的な生徒でした。でもここ日本人学校では彼女のクラスメートは3人で、何が何でも自分の意見を言わなくてはクラスが成り立っていかない状況でした。日本人学校で自分の考えを自分の言葉で表現するということを学んだ、と彼女は話しています。

一人一人にスポットライトが当たるチャンスがいっぱい与えられた学校でした。それを認めてくれる先生と仲間たちがいました。ですから、みんな十二分に自分の能力と個性を発揮することが出来たのです。

1979年9月、学校創立1年後に私は帰国しました。その後日本で中、高、大学を卒業し、ピアノを専攻しましたので、留学の為再びウィーンにやってきました。最初は1年の予定で来たのですが、演奏会のお仕事をいただいたり、後にこちらの学

校で教える機会を得ました上に、ピアニストの主人との結婚、出産と、気がつくと再びウィーンにきてから、早や20年が経ってしまいました。その上今年は創立30周年ということで、本当に長い月日が経ってしまいました。

しかし30年経った今でも当時の団結力と家族のような友情は続いています。今はEメールという凄い手段がありますので、実際何年、何十年と会っていなくても、不思議とすぐに当時の「私たち」に戻ることができます。

川村俊校長先生から記念式典での講演を依頼されたとき、「日本人学校のためなら何でもさせていただきます!」と後先考えずに即、承諾させていただきました。そしてゆっくり考え始めると、ロンドンにいるウィーン日本人学校卒業生第1号でおられる遠藤茂樹さんを誘おうという案が浮かび、すぐに連絡をとりました。彼はお仕事の関係で、この5月から2度目のイギリス勤務に来られていたのです。先輩はすぐに行こうと言ってくださったのですが、多忙なお仕事のスケジュールの都合で、当日朝一番の飛行機に乗ったとしても講演の始まる10時10分にはどうしても間に合わないということでした。

しかし彼の日本人学校への想いも相当なものなのでしょう・・・、多忙極まるスケジュールを調節してくださり、講演前夜ロンドンから駆けつけてくれました。当日、最初は二人とも浦島太郎のように少々戸惑いを感じたものの、昔と変わらぬ雰囲気（これを伝統というのでしょうか）と先生方をはじめ皆さんが温かく迎えてくださって、無事講演を終えることが出来ました。

この有名企業のトップ社員として世界を股にお仕事をされている遠藤先輩を初め、ウィーンに在住の岡本一郎さんは、ウィーン、そしてカナダの大学で勉強され、今は皮膚科のお医者さまになっておられます。30歳半ばという若さで、教授の称号も取得された優秀な方です。そのほか、日本の企業にお勤めの方、日本やアメリカの大学で教鞭をとられている方々、国連に勤めた後米国で世界銀行に勤めている方、アーティストになっている方など、皆さん第一線で活躍されております。この皆の活躍は、ウィーンでの経験が何らかの形で基礎になっていると思います。先程も述べたように自分の個性を発揮し、意見を表現することを学び、学校創立のためにグッと皆の力が結集したあの時の経験をもとに、各分野でご自身の能力を最大限に発揮されているのでしょう。

あの時の思い出、友情、団結、絆は一生のものであります。ウィーン日本人学校の生徒であったことは私の誇りであり、宝です。今の在校生の方が、私の宝であるあの日々を、今まさに毎日体験なさっていることをとても嬉しく思います。皆さんには、今作っておられる宝をもとに、開かれた未来を自信をもって自分の道を大きく羽ばたいて行ってほしいと思います。

最後に・・・このお祝いの年にたった一つ残念なことがあります。私たちのためにご尽力いただいた立岡甚雄初代校長がもうこの世に居られないということです。あの時の先生のご決断とご指導が無ければ、その後の日本人学校はなかったと言っても過言ではありません。私の宝になっているあのすばらしい日本人学校での日々を送らせていただいたことに、そして30年ものあいだ力を注いでくださった全ての方に感謝をするとともに、立岡甚雄初代校長のご冥福を心よりお祈りして、私の話を終わらせたいと思います。



*2008年8月30日に日本人学校創立30周年記念式典で、藤原美穂さんは遠藤茂樹さんとともに「私と日本人学校」をテーマに講演されました=写真。